

## エコロジーからエコソフィーへ

著者	小谷 晴勇
雑誌名	哲学・思想論集
巻	23
ページ	91-103
発行年	1998-03
その他のタイトル	De l'ecologie a l'ecosophie
URL	<a href="http://doi.org/10.15068/00157387">http://doi.org/10.15068/00157387</a>

## エコロジからエコゾフィーへ

小谷 晴 勇

フェリックス・ガタリというたいへんユニークな思想家が『3つのエコロジ』<sup>①</sup>という本を書いている。それについて批判的なコメントを加えつつ、来たるべきエコロジについて以下に論じてゆきたい。

### 一 エコゾフィーとは何か？

彼がこの本でいちばんはじめに主張していることは、エコロジ的な危機に真に対応できるのは、エコゾフィー *ecosophie* だけである、ということである。エコゾフィーというのは、もちろんガタリの造語である。ガタリは新しい言葉をつくるのが大好きであり、造語の名人である。エコ *eco* という語根はギリシャ起源のオイコス *oikos* という意味、家とか住居とか自然環境、広い意味で環境、そこに人間が住む場という意味で使っていると、注にある。ゾフィー<sup>②</sup>はソフィア *sophia*、すなわち知恵である。したがって、エコゾフィーで、「人が生活する環境にかんする知恵」とでもいったところであろうか。強いて訳せば、環境哲学という訳がでてくるであろうが、ここではあえて訳すことなく、そのままこの言葉を使うこととする。このエコゾフィーこそが三つのエコロジだ、とガタリは主張している。

普通エコロジというと、自然環境にかんする問題だけをかんがえてゆく。すなわち環境のエコロジを意味している。そして世界的にもこの運動はさかんに行なわれている。実際、自然環境の問題は人類にとってたいへん大きな問題であるし、それに熱心にとりくむことは

当然でかつ大切であるのだが、それを単独にとりあげていくら頑張ってみても、いま現在われわれがむかいあっている危機を真に解決することはできない。自然環境の問題とともに、社会のエコロジーと精神のエコロジーをかんがえあわせないとだめである、というのがガタリの三つのエコロジー、すなわちエコゾフィーの提唱であるわけだ。

いわれてみれば、コロンブスの卵である。自然環境だけいくらよくても、それだけではどうということはないのである。

小生がいま住んでいるつくば市には、万葉集以来歌に詠まれている筑波山があり、たいへん美しい自然環境に恵まれているばかりか、歴史的な名所でもある。そのつくば市の中心には、磯崎新が設計した、ポスト・モダン様式の代表作といわれる「つくばセンタービル」が建っている。現代日本を代表する建築物である。そこから直線的にのびている広い歩道は左右にけやきが美しく、図書館と美術館へと通じている。この場所の景観はまたたいへんに美しく、建設省から、すぐれた都市景観にあたえられる都市景観大賞を受賞している。

しかし、このようなすばらしい環境のなかに、仮にひとりの研究者が住んでいるとしよう。彼はいま、自分の研究に行き詰まっている。そのうえ、両親も病気で療養中である。人間関係も友達はほとんどなく、孤独で、恋人にもふられてしまった。こういう状況をかんがえてみたらどうだろうか。すばらしい環境に暮らしている彼（女）は、果たして幸せだろうか？

これだけすばらしい環境にあつても、つくば市は決して住みやすくないのである。わたしはなにも特殊な例、特別不幸な例をわざと出しているわけではない。大学があり、国立の、また民間企業の研究所がたくさんあり、そのなかで熾烈な競争が日々おこなわれているのである。精神的にきついというのは当然のことだろう。

これはなにも大人だけに限ったことではない。少し前の話だが、小学生にこういうことがあった。研究学園都市に引っ越してきて、前に通っていた学校ではたいへん成績のよかった生徒が、ここでは1（いちばん悪い成績）がたくさんついた成績をもらってショックをうけたという。こういう話を十年ほど前まではよく聞いたものである。いまでは制度がずいぶんと変えられたようであるが、当時の小学校は絶対評価だったので、クラスでだれかが必ず1をつけられるような成績のつけ方をしていたのである。知的能力はめぐまれた研究者の子弟が不自然におおく集められているので、こういうことが起こる。由緒ある自然に恵まれているばかりか、美しい都市景観もあわせ持つ研究学園都市ではあるが、そこは、大人にとっても子供にとっても、けっして暮らしやすいところではないのである。

このような実例が示すように、自然・環境といった問題を、人間の精神や社会生活といったものから抽象的に切り離して、美しいのどのと言ってみたところで、あまり意味がない。ガタリの三つのエコロジーは、このことを繰り返し主張しているのである。それが、すなわちエコゾフィーという概念なのである。

## 二 主観性とは何か？

ガタリがこの本で、もうひとつよく主張している言葉がある。主観性 *subjectivité* という概念である。

この概念によつて言いたいことは、第一に、人間の精神は、さまざまな人間関係、すなわち社会や、自然環境といったものと無縁ではありえない、それらから独立して存在するものではない、ということである。これはすなわち、先にのべたことを人間の精神という、いわば逆の側からとらえなおしているのである。

第二に、人間の精神は、あのフランス人による非常に古典的な定義による思考する私といった存在ではなく、さまざまな社会的な流れによつて影響をうけて、それらの多様な組合せによつてなりたつものだ、ということである。たとえば、社会のなかで、他者からのさまざまな影響を受けて生きるといふこともあるし、また、言語を使つて生きざるをえないということもある。プライベートな言語というのは、ほとんど思考実験のなかでしかありえないのである。さらに、精神医学の専門家、あるいはかつて精神分析を学んだ分析医としてのガタリは、人間の精神の重層性ということを考え、それを意識的な層と無意識の層にわけて考える。無意識の層にあつては、理性的な主体が生じてくる前の欲望や情動が渦巻く。それらがまだ統御されなかつたかたちで、部分対象が散乱している。こういうものが人間の精神の無意識とよばれる層にあつて、それはその重要な部分なのである。これらが、さらに社会関係と組み合わせられて、人間の精神というものが形成されている。精神とが主体とか言つても、それらは多様な要素の組合せである。これが主観性という概念で、ガタリがとらえなおした人間の精神、主体の存在論的な性格である。この多様性としての精神・主体ということを強力に主張するために、ガタリは主観性という概念をつかつている。

### 三 三つのエコロジーをつらぬく倫理的・美的パラダイム、または強度の論理

以上の二点、エコゾフィーと主観性という概念が、ガタリの主張の基本になるものである。それらの点をふまえて、具体的に三つのエコロジーが各々の領域で展開されてゆくわけであるが、それらを書くものとしてガタリは、倫理的・美的パラダイムを指摘している。<sup>(3)</sup>ガタリじしんの表現にそくして言葉を補えば、三つのエコロジーをつらぬいているのは、科学的パラダイムではなく、倫理的・美的パラダイムである、ということになる。

ガタリは、この倫理的・美的という言葉の意味を、明示的に詳しく説明してはいない。しかし、およそその主張の文脈や全体から察するに、中立的であること、ニュートラルな立場というのはいずれもないのであって、人はなんらかのいるめがねをつけてながめざるをえないということを自覚すること、このいるめがねの自覚を倫理的とよんでいるようである。中立的であるということは現実にはありえない、ということとを少なくとも自覚していること。それを彼は倫理的態度とよんでいるようである。

また美的パラダイムということ、これはむしろ美学的パラダイムと訳したほうがいいかもしれないが、これは古典的な意味での美、あるいは規範としての美が問題となっているのではない。芸術的創造、すなわち何か新しいものを創るということが何より大切である、ということが言いたいようだ。なにかの規範に則って行為する、行動するというのではなくて、どんどん新しいことを行なう、新しいものを組み替えながら創ってゆく、ということが美的といわれている。

もっと具体的に言うと、三つのエコロジーをつらぬいているのは強度の論理 *logique des intensités* である。ガタリによれば、それは運動や変化の過程しか重視しない論理である。さらにいえば、なにかの規範に準ずるものではなく、特異なもの、特異なものに成ること、特異なものへの生成を肯定する論理、これが強度の論理であり、このような強度の論理が三つのエコロジーをつらぬいているのである。<sup>(4)</sup>

三つのエコロジーをつらぬくものについても一ついえば、われわれが直面している現実、われわれに与えられ、われわれがそこを生きている現実、けっして閉ざされたものではなく、不安定ではあるが開かれたものだ、ということである。改革することが可能である、変化が可能である、変容する、とかがえることが三つのエコロジーに共通のものである、と主張されている。

ガタリというひとは、ラディカルな左翼である。もちろん旧来のマルクス主義的な意味での左翼という概念はあてはまらない。現状維持で満足するのではなく、現実をよりよい方向に変容しなければならないとかがえている、という意味での左翼である。だからこういう原理が出てくるのである。

以上の論点と概念を念頭において、これから三つのエコロジーを順番に論じてゆこう。ガタリは、これら三つのエコロジーの諸原理は、どれも一致するものではなく、互いに矛盾するものであるから、それぞれを別個に論じなければならない、といっている。

#### 四 精神のエコロジー

精神のエコロジーの原理は創造である。そこでは排中律がなりたたず、善と悪、美と醜、内と外とが共存する無意識の論理、いいかえれば発生状態の主観性の論理に依存している、とガタリはのべている。<sup>(5)</sup>

ここでガタリは、幻想のエコロジー *écologie du fantasme* をかんがえなければいけない、といっている。<sup>(6)</sup> 幻想のエコロジーとは、人間のうちにひそむことがありうる（人間のうちに先験的にそなわっているとか、内在しているということではない。たとえば、原罪とか死の本能とかいったものではない。）悪への対処法である。たとえば、殺人や強姦といったものなら、少数の極端な例かもしれない。しかし、無意識のうちにひそむ人種差別や人種の偏見、さまざまな差別の感情、などといったらどうだろうか。これを特殊な人格のみがもつ特殊な感情や価値判断であるといえるだろうか。おそらくはそうではあるまい。また、強姦といったら少数のケースかもしれないが、のぞき見といったものならどうだろうか。これは精神病院に入院して、治療が必要な人のみがもちうる特殊な衝動だろうか。それを実行するのは少数であろうが、そのような衝動にかられるということであるならば、人間にとってめずらしいことであろうか。

ガタリはこれらの悪を肯定しているのではもちろんない。そうではなくて、それらが決して例外的ではない人間の精神的事実として認識し、それに対処しなければならない、といっているのである。なぜなら、これらへの対処が遅れば、それらが内面的衝動にとどまることなく現実のものとなるおそれがあるからである。それは、差別の感情から殺人や侵略といったものまで、さまざまな可能性がかんがえらる。それらが、特殊なものではなく、一般的で社会的なものであればあるほど、それらの現実化の可能性は高いのである。

それらのもとになる人間の感情や欲望は、特殊なものではなく、普通に存在している。そして、それらは、芸術的な創造の根源にあるものと無関係ではないのである。だからわれわれは、はつきりと認識して幻想のエコロジをかんがえなければならない。無意識の欲望や衝動、感情を別の方向へとみちびかなければならない。これが、幻想のエコロジの主張である。そして、それは精神のエコロジの重要な部分である。

筆者はガタリの三つのエコロジという発想に、すなわち総合的なエコロジをかんがえなければならぬ、という理論に賛成であるが、とくにこの幻想のエコロジをとく一節には深い感銘をおぼえた。ドゥルーズIIガタリとはいうものの、どちらかといえば影が薄いガタリではあるが（ドゥルーズにかなする研究書はかなりの数にのぼっているが、雑誌の特集は別として、おそらくガタリにかなする研究書はまだ存在しないし、ガタリ論もきわめて少ないのが現状である）、この人はやはり思想家というに値する、人間の深いところにまでしっかりと目のゆきとどいた器の大きい人だ、とこの一節を読んでかんじた。

## 五 社会のエコロジ

ガタリによれば、社会のエコロジの原理は、さまざまな規模の人間集団における感情の備給とその促進に関係する。<sup>(1)</sup> やや難解な表現であるが、要するに、家庭や学校や職場などといった社会的集団の中で、他者に対する共感や愛情をいかに育んでゆくかが、社会のエコロジの重要な問題である、という程の意味であろう。

ここで彼は『アンチ・エディプス』以来の持論を展開する。すなわち、社会関係には二種類あり、それは閉じられた関係と開かれた関係である。閉じられた関係とは、家庭、家族的なものである。開かれた関係とは、社会や宇宙にむかつて開放された主体―集団である、という。

ここでいわれている主体―集団とは、自覚的な主体が孤立せずに連帯感をもって集団を形成している状態、といったものである。社会と個人の位相を図式化すれば、一方の極に社会的諸関係から独立・孤立した個人がいて、他方の極に群衆、個人がまったく自律性を持たず、そのなかに溶解してしまったような集団、顔のない大衆がある。この両極の中間に、先の主体―集団を位要づけることができる。

さらにガタリは、資本主義社会がさらに発達してどういう形態をとるかに深い関心を示し、それを統合的世界資本主義 Capitalisme Mondial Intégré (CMI) とよんで分析しているが、特に社会的エコロジーの実践という観点から興味を示しているのは、メディアの問題である。なんとかしてメディアの内実を変えてゆくこと、変革してゆくことが社会的エコロジーのポイントではないか、と彼はかんがえている。彼はそれをメディアの再特異化とよんでいる。開かれた集団、意識の高い主体―集団がメディアを獲得して、そこから世の中が変わってゆくのではないか、あるいはそのきつかけがつかめるのではないかという可能性に、ガタリはつよい希望をいだいているようである。

## 六 環境のエコロジー

ガタリの本の中では、環境エコロジーにさかれている部分はきわめてすくない。それは、この書物の性格やガタリの主張からいって、ある意味では当然であろう。環境エコロジーにはすでにおおくの論客があり、また実践もなされている。そのことじたい否定するわけではないが、真の人類の未来をかんがえるならば、環境のエコロジーだけを単独で行なってもだめである。その外に、精神のエコロジーと社会のエコロジーを総合的にかんがえなければならない、というのがすでにくりかえしのべてきたガタリの主張である。要するにガタリのエコゾフィーは、すでに現行の環境エコロジーの存在を前提としているのである。したがって、あらためて環境エコロジーにかんしてさまざまな具体的提言をするまでもない、と彼はかんがえたのかもしれない。

しかし、環境エコロジーへの言及も皆無ではない。環境エコロジーの原理について、最悪の破局からしなやかな変化まですべてが可能である、とのべている。

また、具体的な提言として、第一に、空気中の酸素、オゾン、炭酸ガスの調整など、第二に、サハラ砂漠の再生、アマゾンの修復、第三に、新種の動植物の創造、などといったことを提案している<sup>(8)</sup>。

新種の動植物の創造などといった提言、あるいはサハラ砂漠の再生などといった発想はユニークで、いかにもガタリらしいが、本書の他の部分、または精神のエコロジー、社会のエコロジーといった部分に比べると、内容が薄くて貧弱である、といった印象はまぬがれない。



## 七 ガタリのエクリチュールの問題点

以上が、ガタリの『三つのエコロジー』の概要であるが、全体にわたる問題を最後に論じておきたい。

おそらく、筆者がガタリを解説した文章は、それほど難解ではないだろう。しかし、筆者としては、彼の思想をずいぶん安っぽく平板にしたのではないかと危惧している。逆にいえばガタリのこの本はそれだけ難解なのである。一読して、この本（この本ばかりではなくガタリの書いたものはすべてそうであるが）は、なんと晦渋なのだろう、難解な表現に満ちているのだろう、という印象を受ける。

はつきり言つて、ガタリという人は、説明するのはうまくない。もちろんたいへんユニークな存在で、アイデアはあふれ出てくるし、新しい概念や言葉をつくるといった能力はたいへんなものだし、すごいんだけど、それを他人にわかりやすく説明するといった能力は欠けている。

ドゥルーズとの共著の中で、彼（ら）は、哲学とは概念の創造である、と述べている。そういわれてみると、たしかに独特な言葉、概念をつくらなかった偉大な哲学者というのは、プラント以来いないのである。

彼らが知らなかった日本の文脈でかんがえてみても、独創的な哲学をつくったといわれる数少ない哲学者のひとりに、西田幾多郎がいる。彼の思想は一般に西田哲学とよばれているが、たしかに西田哲学は彼が創り出した独特の概念や用語に満ちており、それらと不可分なのである。

また、まだ評価が定まっているとは言い難いが、独特の哲学をつくったともいわれる廣松渉にも、同様のことがいえる。

こういった例を念頭に置くと、やはりあたらしい思想をつくるということ、あたらしい概念をつくるということと不可分なのではないか、という気がしてくる。

しかし、一方では、本当に社会を変革するという理想に燃えているのであれば、ガタリほどの人であれば、高校生ならばだれにでもわかるような表現で、三つのエコロジーを書くべきではないのか、という気もある。社会変革のメディアたることを本気でかんがえているならば、このようなパンフレットの的な小冊子には、別の表現がありうるのではないだろうか。ともかくあまりに晦渋すぎ、現代フランス思想の

専門家以外は、おそらくこの本を読みはじめたとたんに敬遠するであろう。それでは、三つのエコロジが思想としてどんなに正当であろうと、社会に広まることはない。それでいいのだろうか。

ところで、高校生にもわかるような言葉で哲学をつくりたい、といっている人がいる。梅原猛である。彼が言うには、自分は今まで梅原日本学といわれるように一連の日本古代史研究、日本文化研究、さらには小説や劇作までおこなってきた。しかし、哲学者という肩書きで呼ばれることもある自分に、まだ哲学がない。そこで、人生の最後に、自分の哲学をつくりたいのだ、と。そして、どういう哲学がつくりたいのかというと、どうやらそれは、ガタリの問題意識とかなり近いこと、梅原じしん環境哲学とは言っていないようであるが、人類がこれから先、いかに自然と共生しうるか、ということをかんがえ、その哲学的思想的な原理を提出したい、ということらしいのである。そして彼は『森の思想が人類を救う』<sup>(9)</sup>という本を書いている。この本はたしかに平明にかかっている。また、仏教を援用して、あらゆる生きとし生けるものには平等に生命が尊重されなければならない、とかかっていたり、菩薩行としての自己犠牲、利他行を主張したり、内容がなしいとはいえない。しかし、これがのちに西田哲学のように梅原哲学として歴史に残るようなものであるとは、正直なところ、とうていおもえないのである。そんなに森が大切ならば、なぜ梅原氏は一年に、五冊も六冊も本を書くのか。おそらく哲学者でこれほど本を出して、紙を使っている人はほかにいまい。森を大切にといっている哲学者が、いちばん森林破壊に貢献しているのである。こんなパラドックスはない。このようなパラドックスをはらんだ森の哲学が、哲学として残るわけがないのである。

しかし、梅原氏はできないにしても、高校生でもわかることばで哲学をつくるということができないとはいえないし、筆者としてはその可能性まで否定することはできない。そして、高校生でもわかることばで哲学をつくるということは、方向としてはとてもいいと筆者はかんがえるのである。それはわれわれにのこされた課題である。

## 八 三つのエコロジをこえて

拙論ではいままで、もっぱら『三つのエコロジ』という本に則してガタリ思想について論じてきた。その際、ガタリという人物とその生の軌跡については、ほとんどなにもふれてこなかった。それでもガタリ思想のある面は、よくとらえられるとおもう。しかし、思想

というものは、それを創りだした思想家の生からまったく切りはなされて、抽象的に存在するものではない。最後に、そこから三つのエコロジをこえるなんらかの示唆をうるために、ガタリの人と生にかんする若干の事実をつけくわえたい。

ガタリは一九三〇年生まれで精神科医で、同時に左翼の活動家というユニークな人物であった。ラカン派の精神分析を学んでいたが、途中から疑問をいだきはじめた。一九六八年フランスを席卷した五月革命が終息して、直後に、哲学者のジル・ドゥルーズに出会う。二人は意気投合して、共同で著作を執筆する。それがフロイト・ラカン派精神分析の批判、同時に非歴史的な構造主義の批判である『アンチ・エディプス』（一九七一年）である。これが評判を呼び、彼らは一躍脚光をあびることになる。彼らはのちに何冊も共著を出版し、独特の仕事をし続けるが、一九九二年、ガタリが世を去ることで、この共同作業は幕を引くこととなる。つけくわえれば、ドゥルーズも一九九五年に自殺して死んだ。筆者は、ガタリの訃報（享年六二才）を聞いて、これからまだまだ皆さんの仕事を期待していた矢先だったので、愕然としたことをおもいだす。彼の思想は、ラディカルだし、人を勇気づける、元気づけるところがとても魅力である。しかし、同時に彼の思想は、人をしてたいへんな緊張をしいるところがある。

たとえば、三つのエコロジに則して言えば、社会のエコロジにおいて開かれた人間関係、主体―集団に身を向けていくという選択は、一時的にならともかく、ずっと続けていこうとしたら、たいへんな精神的負担になることもあるはずである。

しかし、実際ガタリは、彼の思想の通り生きた。彼はつねに世界中を駆けめぐっていた。さまざまなグループの人々とつきあいがあったけれども、それはたいへんな努力を必要としたことであると思う。

また、精神のエコロジにしても、人間の精神の深いところにある過剰なものをなんとか浄化しようとして他者と向き合おうとしたら、たいへんな緊張感をいられるにちがいない。

三つのエコロジというかんがえかたは、理論的には正しいだろう。しかし、彼が規範を離れる自由とか、特異なものへの生成を主張することは、自由で開かれていて、その意味で楽しい未来を切り開いてゆくことではあるが、同時にそれはたいへんな努力と緊張をしいるものではないだろうか。

私事ではあるが、筆者が茶の湯をはじめようになつたきっかけは、ドゥルーズ・ガタリにかんする論文をかくために勉強していて、精

神的に耐えられなくなったからなのである。なごみの時間がほしかったのである。それはもう一昔前のことであるが、こんど拙論を書くための準備として、ひさしぶりにガタリを読み返しているうちに、茶の湯をはじめた当時のことを、自然に思い出してしまった。

三つのエコロジーというのは、理論的な枠組みとしては真つ当だし、すばらしいところもたくさんあるが、ただそれをそのまま実践したのではあまり幸福にはなれないのではないかという気がするのである。

どうも三つのエコロジーには、このエコロジーのエコロジーといったものが必要になってくるのではないだろうか。たとえば、なごみのエコロジーであるとか。エコロジーというのは、元来は豊かな生へと導くためにあるはずのもので、そのエコロジーのためにまた他のエコロジーが必要だということもおかしなことはないではある。しかし、正直に言えば、三つのエコロジーには、メタレベルでもうひとつのエコロジーが必要であって、ゆとり、余裕、なごみの時間をどうやってつくるかといったような、なごみのエコロジーが必要なのではないかと思われる。

注

- (1) Félix Guattari, *les trois écologie*, Editions Galilée, 1989.  
フェリックス・ガタリ『三つのエコロジー』杉村昌昭訳、大村書店、一九九一年。
- (2) Ibid. p. 49. 邦訳七一頁。
- (3) Ibid. pp. 25-26. 邦訳二二～二二頁。
- (4) Ibid. pp. 35-37. 邦訳三二～三四頁。
- (5) Ibid. p. 50. 邦訳四七頁。
- (6) Ibid. p. 55. 邦訳五二頁。
- (7) Ibid. p. 58. 邦訳五六頁。
- (8) Ibid. pp. 68-69. 邦訳六五～六六頁。
- (9) 梅原猛『森の思想』が人類を救う』小学館、一九九一年。

## De l'écologie à l'écosophie

KOTANI Haruo

哲学・思想論集第二十三号

Félix Guattari affirme que seule l'écosophie répond vraiment à la crise écologique dans son *les trois écologies*. L'écosophie équivaut à trois écologies : l'écologie environnementale, l'écologie sociale et l'écologie mentale.

L'environnement, la société et le psychisme ne sont pas indépendants, mais existent réciproquement. Aussi est-il insuffisant de se limiter à la crise de l'environnement naturel. Guattari affirme donc la nécessité de penser synthétiquement les trois écologies.

L'écologie mentale implique la sublimation des fantasmes internes et destructives, et l'écologie sociale propose la constitution de groupes-sujets s'ouvrant largement sur le socius et le cosmos. Dans l'ensemble les trois écologies supportent la logique des intensités qui affirme des devenirs et des singularités.

Ses affirmations sont correctes, mais elles obligent les hommes à une forte tension. Il faudrait une autre écologie de détente qui les en délivre.